

# 『異邦人』 形成の時期と『異邦人』

——『異邦人』解釈——（その5）の②

平 田 重 和

小学校を出るとほとんどが、近くの町工場に働らきに出るという土地柄であるベルクール地区に育ったカミュが、小学校の先生であるジェルマン先生によってその才能を見いだされ、給費生として中学校（リセ）に進学し、この出来事を契機に世に出、ノーベル賞を受賞するまでになったことは、あまりにも有名な話である。しかし、当時アルジェの東はずれにあったベルクール地区からアルジェの中心街を少し越えてリセ・ダルジェに通学するということは、カミュにとってかならずしも喜ばしいことばかりではなかった。

筆者が1989年にアルジェを訪れ、リセ・ダルジェからカミュの家のあったベルクール地区まで徒歩で歩いて、その距離を実感しようと試みたときは、すでにカミュが電車通学した市電は廃止され、町の中央部とベルクール地区も街続きになっていて、町の中央部とベルクール地区の差はそれほど感じなかったが、貧富の差が当然のこととしてあった時代では、今日我々が想像する以上にその落差は大きなものがあったであろうことは推測するに難くない。少し長くなるが、その辺の事情を西永氏が、簡潔に描写しているので引用してみよう。

アルベール・カミュは1923年から30年まで、ベルクールの労働者街に育った子供とはまったく例外的に、また小学校を出るとただちに保健会仕で働きはじめていた彼の兄リュシアンとも対照的に、アルジェ西部のリセ・ダルジェに学ぶことになるが、彼がそこで体験したことは、通常考えられるような誇らしさとはまったく別のものだった。というのも、ベルクールか

らリセに通うことは、たんにアルジェの街を東から西に横切ることではなく、まだ敵対はしていなかったかもしれないが、少なくとも対立はしていた二つの世界、一方は貧困と無文化、他方は富とそれに結びついた教養の世界を往復することだった。この環境の違いに加えて、彼は学友の大半がブルジョアの子弟であり、地方都市のエリートの特性として、とりわけ強く普遍性への志向を持つリセに行けば、すでに働きに出ている幼友達や家族の話す言葉（カガユーCagayou）という直載で生き生きとした特殊な俗語だった）を用いるわけにはいかず、帰宅すれば昼間リセで聞いたり話したりする言葉や話題が理解されることはなかった。つまり彼は、心理的にはもとより、言語的にも二重生活を送らざるを得なかったのだ。彼はこの二つの異なった世界の間引き裂さかれ、そのいずれにも違和感を持たざるを得ず、しかもこのいずれの世界にとっても、彼は一種の異邦人だった。学校で、父母の職業欄に「家政婦」と書くとき、あるいは、たまに二つの世界の間（彼の家族と彼の友達の家族）が賞状授与などで出会うときには、それは彼にとって、「恥ずかしさをもつ、そして恥ずかしさをもつことの恥ずかしさ」を味わうこの上もない屈辱的な機会となった。

更にカミュの羞恥心と孤独を示す例とも言える証言をグルニエが次ぎのように述べている。

アルベール・カミュがまだ17歳でしかなかった時の、彼とのあの会見を私はいつまでも思い出すだろう。私はアルジェ官立高等学校の教授に任命されたばかりで、その1930年度の哲学級の生徒として、新学期に押しかけた多数の生徒たちのなかに彼がいたのである。

教師にとってしつけにくいようすを自然と身につけていたからであろうか？ 間近でよく目につくようにと私は彼が最前列に着席することを言い渡しておいた。およそ1ヶ月がすぎたであろう。その頃から長期にわたって授業に出てくる姿を見かけなくなった私は彼の消息を尋ねた。病気だということだった。私は彼の住所を調べた。高等学校の区域とはまるで反対

のはずれにあり、私の知らないところだった。ようやく私は決心して、アルベール・カミュの友達である一人の生徒と連れ立ってタクシーに乗った。車で行くとすぐに着いた。建物の外観はみすぼらしかった。私たちは一段階あがった。そこの一部屋に私はアルベール・カミュがすわっているのを見た。彼はろくに挨拶も述べず、彼の健康についての私の質問にも単音節でそっけなく答えた。やってきた私たち、私と彼の友達とが彼には迷惑そうだった。言葉がとぎれるたびに沈黙がはさまった。私が死刑囚にその上告の却下されたことをつげる検事のような役目をひきうけていたように思われる。私が会いに行った相手のそんな態度は、反抗であり敵意であったということになるだろうか？ その敵意は個人としての私に向けられていたのではなかったはずで、むしろ私が社会の一個の代表者（生徒に対する教師）である以上、その社会に向けられていたのであった。アルベール・カミュはほとんど私をしらなかったのが実状だし、それまでに彼の気にさわったというふしは何もなかった。だがまた、病気で貧しく、父なし子で、その願が理解されず鼓舞されなかった環境に生きている若者の、意地というものも、考慮に入れなくてはならず、そういう意地が若者を不機嫌にすることがあり得るのである。この点については更に差恥を問題にしなくてはならない。高貴な魂は内心の苦勞を他人とともにわかっことを好まないといわれてきたあの差恥である。後者の感情のことはその当時は私の心に浮かんでこなかった。あとでそれが私には決定的な感情であると思われるようになった<sup>2)</sup>。

旅もまたカミュに<異邦性>を感じさせたものである。旅は、カミュにとっては、所謂観光旅行などではなく、全く別の趣があったと言えるだろう。旅は、「我々のうちにある一種の内的背景をぶち壊す<sup>3)</sup>」からである。

1935年8月、最初の妻、シモーヌ・イエとバレアレス諸島へのヨット旅行をきっかけに、貧しかった割には幾つかの旅を実行しているが、その中でも『異邦人』との関係で重要なのは、1936年6月に、やはりシモーヌ・イエと中央ヨーロッパ（オーストリア、チェコ、）イタリアの各地を廻った

旅の経験である。

シモーヌ・イエという女性はもともと、マクス＝ポル・フーシェという友人から奪う形で妻にした女性であったが、結婚当初は伯父のアコー夫妻の援助もあり、人並みに平凡な結婚生活を送っていたようだ。しかし、破局は比較的早くやってきた。

この旅行は若い夫婦と『アストリアスの反乱』の共同制作者の一人であったブルジョアという三人組みのチームで、「インスブルックからクーフシュタイン（ドイツ国境近く）まで、つまりイン川の美しい渓谷沿いの65キロの区間<sup>4)</sup>」をカヤックで下るといったものだった。そして旅の途中で局留めの郵便物をその都度受け取っていた。そうした郵便物の中に妻のイエ宛のものがあつた、カミュは妻の代理人として、差出人が医師からの手紙を開封した。内容を読んでみると、援助——麻薬という形での——申し出だったことにとどまらず、「手紙の主とシモーヌとの関係は、医者と患者の通常を超えて、はるかに親密であることがはっきり示されていた<sup>5)</sup>」ものだった。

シモーヌ・イエはアルジェに住む医師の娘で、当時彼女を知っていた者の証言ではなかなかの美人だったというこだし、資料として残っている写真を見てもそれがうなずける程の美人であったことは確かな様だが、すでにカミュと交際し始めた頃から、麻薬に手を汚していた娘であったようだ。旅から帰国後にカミュはシモーヌと離別している。

最近刊行された Olivier Todd の Albert CAMUS(knopf)<sup>6)</sup>を読むと、カミュは相当なプレイボーイだったことがわかるが、最初の結婚がこのような形であったことは、若いカミュに相当な精神的打撃であったことは想像に難くない。このような体験が『異邦人』の中でのあのマリーに対するムルソーの結婚観に反映していると見るのは短絡過ぎるだろうか。

『異邦人』の中でムルソーとマリーとの結婚問答の場面はこの作品を卒業論文に扱う学生が常に悩む場面だが、ムルソーの結婚観、ひいてはカミュその人の結婚観を推測すれば、このところは比較的容易に納得がいくのではないだろうか。

現在先進国社会で一般的な一夫一婦制は、近代人が最大多数の最大公約数的に作り上げた文化の一形態であるに過ぎない。結婚は大多数の人が選ぶ形式ではあるが、これが人生における人間の選ばなければならない唯一絶対的なものでないことはいうまでもないことであろう。ムルソーには結婚歴はないが、本能的にこのことを知っていたのである。

結婚のことだけではない。小説の第一部でのあの *insensibilité* なムルソーは、何時『シーシュポスの神話』の中で描かれている不条理な人になったという記述はないが、ある時ある街角で「ふと」不条理な感覚に襲われた経験を持っていることは確かなことである。正確に言えば不条理人の英雄になる以前の不条理人は、今で言う鬱病患者そのものであると言っても過言ではない。鬱状態になると、未来は一瞬のうちにどうでもよくなり、人生を設計し、それに向かって努力しようなどという気持ちはどこかえ行ってしまうものである。極端な場合は今日、明日のことも生活設計する気もなくなり、自分の描く行動をとる意欲も無くしてしまう。ムルソーが、母親の死の知らせを受け取り、仕方なく、バスに乗って80キロ離れた養老院まで出かけるが、母親の葬儀のセレモニーを全て受身的に行動するのも、意欲し計画し行動するという精神状態にないからである。レイモンというヤクザと友人関係を結ぶのもそうだし、果てには殺人を犯すのも「すべてがどうでもよく、何事も自分にとっては同じことだからである。」

ムルソーが部屋のバルコニーに出て、外を眺めて過ごす例の「あいも変わらぬ嫌な日曜日」の描写は鬱病患者の典型的な様子と言えないだろうか。

Les lampes de la rue se sont alors allumées brusquement et elles ont fait pâlir les premières étoiles qui montaient dans la nuit. J'ai senti mes yeux se fatiguer à regarder ainsi les trottoirs avec leur chargement d'hommes et de lumières. Les lampes faisaient luire le pavé mouillé, et les tramways, à intervalles réguliers, mettaient leurs reflets sur des cheveux brillantes, un sourire ou un bracelet d'argent. Peu après, avec les tramways plus rares et la nuit déjà noire au-dessus des arbres et des lampes, le quartier s'est vidé

insensiblement, jusqu'à ce que le premier chat traverse lentement la rue de nouveau déserté. J'ai pensé alors qu'il fallait dîner. J' avait un peu mal au cou d'être resté longtemps appuyé sur le dos de ma chaise. Je suis descendu acheter du pain et des pâtes, j'ai fait ma cuisine et j'ai mangé debout. J'ai voulu fumer une cigarette à la fenêtre, mais l'air avait fraîchi et j'ai eu un peu froid. J'ai fermé mes fenêtres et en revenant j'ai vu dans la glace un bout de table où ma lampe à alcool voisinait avec des morceaux de pain. J'ai pensé que c'était toujours un dimanche de tiré, que maman était maintenant enterré, que j'allait reprendre mon travail et que, somme toute, il n'y avait rien de changé.<sup>7)</sup>

この描写から受けるものは白黒の映画を観ているような印象ではなかろうか。『異邦人』のエクリチュール、とりわけ第一部のエクリチュールを評して、ロラン・バルトは「白いエクリチュール」と呼んだ。『異邦人』全体から受ける印象はまさしくそうした印象であろう。

ムルソーは母の遺骸と対面することを拒否するということで指弾される。はじめは「ママンにすぐ会いたかった」と母との対面を考えていたが、しかし、養老院に着いてから気が変わって、遺骸を見ようとしなかった。この心境の変化をムルソー自身説明してないけれども、『結婚』の中の「ジェミラの風」で「私は人々が死ぬのを見た。特に犬どもが死ぬのを見た。私をびっくり仰天させたのは、それに触れることである<sup>8)</sup>」と述べている。草稿ではこれに続けて「犬どもは物になった。それで私は、私もまた物になるだろうと内心想った」と書いている。

死を忌み嫌ったカミュの心情は、「ジェミラの風」における「死は、………恐ろしく不潔な事件なのだ。」という文章にも充分表現されている。

しかし、「死を忌み嫌った」カミュの証言をいくつ列挙しても、最初は「ママンに会いたかった」ムルソーが、いわゆる「最後のご対面」のときに「ふと」それを嫌がった心境の説明にはならないのではないか。ムルソーは「ふと」「対面」する気が失せただけでそこにはたいした意味はなく、そのよう

な反応を示しただけなのかも知れない。この点を取り上げて、ムルソーの母親に対する愛情の程度を云々するのは、的はずれになる恐れがありはしないだろうか。

もちろんムルソーはカミュの創造したフィクション上の人物で、デフォルメされていることは当然だが、似たような精神状態をカミュが経験していたことは、筆者は『ジイドの青春』を書いたジャン・ドレのような専門家ではないが、小説の第一部のムルソーは鬱病的症状から説明がつくものと考えている。

さて、今一度旅の話に戻ってみよう。

Il (筆者注：旅) brise en nous une sorte de décor intérieur. Il n'est plus possible de tricher — de se masquer derrière des heures de bureau et de chantier (ces heures contre lesquelles nous protestons si fort et qui nous défendent si sûrement contre la souffrance d'être seul) …………….

Le voyage nous ôte ce refuge. Loin des nôtres, de notre langue, arrachés à tous nos appuis, privés de nos masques ( on ne connaît pas le tarif des tramways et tout est comme ça ), nous sommes tout entiers à la surface de nous- même.<sup>9)</sup>

上記の引用で、旅に対するカミュの考えは、明瞭だと思うが、上記引用文中省略したところはこうだ。

C'est ainsi que j'ai toujours envie d'écrire des romans où mes héros diraient: « Qu'est-ce que je deviendrais sans mes heures de bureau? » ou encore : « Ma femme est morte, mais par bonheur, j'ai un gros paquet d'expéditions à rédiger pour demain. »<sup>10)</sup>

これに関してパンゴーは次のように述べている。

Le déplacement est intéressant : substituons « maman » à « ma femme » et nous aurons le début de *L'Etranger*. De telles expériences permettent d'établir un lien entre le sentiment de l'absurde — qui surgit, lui aussi, avec l'écroulement des « décors » et la nostalgie.<sup>11)</sup>

1936年のオーストリア、チェコ、イタリア旅行の体験から実った『裏と表』の中の「魂の中の死」の前半も、パルマでの体験と主調音はほとんど同じである。

チェコの教会の中で、

…………… essayant d'y retrouver une patrie, mais sortant plus vide et plus désespéré de ce tête-à-tête décevant avec moi-même.

……………  
Aussitôt sorti, j'étais un étranger.

……………  
Eglises, or et ensens, tout me rejette dans une vie quotidienne où mon angoisse donne son prix à chaque chose. Et voici que le rideau des habitudes, le tissage confortable des gestes et des paroles où le cœur s'assoupit, se relève lentement et dévoile enfin la face blême de l'inquiétude. L'homme est face à face avec lui-même: je le défie d'être heureux... Et c'est pourtant par là que le voyage l'illumine. Un grand désaccord se fait entre lui et les choses.<sup>12)</sup>

『結婚』の「砂漠」について、白井浩司氏が反抗という言葉が8回も使われていると指摘し<sup>13)</sup>、次第にカミュの生に対する構えがハッキリとしてきたと評したものであるが、反抗の対象（反抗を生み出すもの）は死とか人生の無用性といった否定的なものであることは言うまでもなからう。すなわち、人間を孤独にし、異邦人にするものである。

Le matérialisme le plus répugnant n'est pas celui qu' on croit, mais bien celui qui veut nous faire passer des idées mortes pour des réalités vivantes et détourner sur des mythes stériles l'attention obstinée et lucide que nous portons à ce qui en nous doit mourir pour toujours.<sup>14)</sup>

Irai-je plus loin? Les mêmes hommes qui, à Fiésole, vivent devant les

fleurs rouges ont dans leur cellule le crâne qui nourrit leurs méditations.<sup>15)</sup>

Fiésolle, Djémila, et les portes dans le soleil. La mesure de l'homme? Le silence et les pierres mortes. Tout le reste appartient à l'histoire.<sup>16)</sup>

貧困は、カミュの場合、必ずしも否定的な側面として捉えることはできない。しかし、後に成功して、やや距離を置いて過去を眺められるようになった時に、貧困が怨恨を生じることばかりではないと言えるのであって、貧しさの中にどっぷりとつかっているような状態の時には貧困は、孤独と断絶観と異邦性を感じさせるのに充分であったと思われる。

前稿（『仏語仏文学』27号 関西大学フランス語フランス文学会）で述べたように『異邦人』はパリのモンマルトルの小さなホテルにおいて完成されたが、アルジェで居場所がなくなりパリに出たときのカミュの印象は次のようなものである。

Que signifie ce réveil soudain — dans cette chambre obscure — avec les bruits d'une ville tout d'un coup étrangère? Et tout m'est étranger, tout, sans un être à moi, sans un lieu où refermer cette plaie. Que fais-je ici, à quoi riment ces gestes, ces sourires? Je ne suis pas d'ici — pas d'ailleurs non plus. Et le monde n'est plus qu'un paysage inconnu où mon cœur ne trouve plus d'appuis. Et étranger, qui peut savoir ce que ce mot veut dire.

\*

Etranger, avouer que tout m'est étranger.

Maintenant que tout est net, attendre et ne rien épargner. Travailler du moins de manière à parfaire à la fois le silence et la création. Tout le reste, tout le reste, quoi qu'il advienne, est indifférent.<sup>17)</sup>

『異邦人』執筆時期に、共産党に入党し、党の方針に合わないからという

ようなことで脱党したり、新聞記者として、「カピリー地方の悲惨」と題した連載ルポルタージュを書いたり、冤罪事件に関して容疑者の弁護をしたりと、今日で言うところのアンガージュマン的活動をし、挫折感を味わったこともあったということについては、前稿（『仏語仏文学』27号 関西大学フランス語フランス文学会）でもある程度のことは触れたし、パンゴーの言うように、『異邦人』がどれほどそれ（筆者注：参加の文学）を反映していないかがわかって驚くほかない<sup>18)</sup>ということもあるので、本稿ではこの点については、省略したい。しかし、社会的疎外も人を滅入らせるには充分であることも確かなことである。

結局はパンゴーのいうように伝統的な「源泉」批評とあまり代わり映えがしない方法であったかも知れないが、カミュに『異邦人』を創造させる素地となったであろう事柄をいくつか見てきた。

しかし、主にカミュの孤独、断絶感、挫折感といった否定的な側面に焦点をあわせただけでは、作家が「決意」しなければ、作品が生まれないことはいままでもないが、『異邦人』は断絶感や異邦性を作家が強く体験したからというだけでも生まれない面がある。

『異邦人』はここでも多面的なのである。第一部のムルソーは、マリーと水浴して幸福な気分になっているし、獄舎につながれたムルソーも「夏の夕べの薫りと色を感じ」とったりもしている。そして最後には「世界の優しい無関心」に心を開いてゆくのである。ムルソーのこうした面にも注目しなければならぬことはいままでもない。

いくら素地を列挙しても「虚しい」作業になるかも知れないが、「世界の差し出す富」に触れて、幸せだったカミュについて触れなければやはり不十分ということになるろう。

では次に、『異邦人』が創作されたであろう期間に焦点を当てて、肯定的な側面について若干考察を試みたいと思う。

ムルソーは『異邦人』刊行直後の批評でよく言われたように無感覚 *insensibilité* な男ではない。ムルソーは冷酷非情な虚無的な男だと決め付けてしまうと一方的な「読み」になってしまう。肉体を爽やかにしてくれるもの（自然の恩恵）には特に敏感である。とりわけ小説の第一部においては、マリーとの水浴の時に幸せだったように、感性の人であるといって過言ではないであろう。こうした自然に対する敏感な肉体的反応が、「太陽のせい」で殺人を犯すにいたるとさえ言ってもいいだろう。本人も裁判の過程でそれを認めているのだから。

ムルソーは虚無的な行動をするかたわら叙情詩人的な面を持った、感性豊かな男でもあるのだ。

母の埋葬をすませ、一夜明けた時、

Quand je suis sorti, le jour était complètement levé. Au-dessus des collines qui séparent Marengo de la mer, le ciel était plein de rougeur. Et le vent qui passait au-dessus d'elles apportait ici une odeur de sel. C'était une belle journée qui se préparait. Il y avait longtemps que j'étais allé à la campagne.<sup>19)</sup>

そして、母の棺が出発してから、

Je regardais la campagne autour de moi. A travers les lignes de cyprès qui menaient aux collines près du ciel, cette terre rousse et verte, ces maisons rares et bien dessinés, je comprenais maman. Le soir, dans ce pays, devait être comme une trêve mélancolique. Aujourd'hui, le soleil débordant qui faisait tressallir le paysage le rendait inhumaine et déprimant.<sup>20)</sup>

また、

Autour de moi, c'était toujours la même campagne lumineuse gorgée de soleil. L'éclat du ciel était insoutenable. A un moment donné, nous sommes passés sur une partie de la route qui avait été récemment refaite. Le soleil

avait fait éclater le goudron. Les pieds y enfonçaient et laissaient ouverte sa pulpe brillante. Au-dessus de la voiture, le chapeau du cocher, en cuir bouilli, semblait avoir été pétri dans cette boue noire. J'étais un peu perdu entre le ciel bleu et blanc et la monotonie de ces couleurs, noir gluant du goudron ouvert, noir terne des habits, noir laqué de la voiture. Tout cela, le soleil, l'odeur de cuir et de crottin de la voiture, celle du vernis et celle de l'ensens, fatigue d'une d'insomnie, me trouvait le regard et les idées.<sup>21)</sup>

さらに、

Il y a eu encore l'église et les villageois sur les trottoirs, les géraniums rouges sur les tombes du cimetière, …………… la terre couleur de sang qui roulait sur la bière de maman, la chair blanche des racines qui s'y mêlaient, encore du monde, des voix, le village, l'attente devant un café, l'incessant ronflement du moteur...<sup>22)</sup>

獄舎に捕らわれの身となつてからのムルソーの感覚も以前と変わらないところがあることは、いくつか引用例を示すこともできるだろう。

そして、『異邦人』の最後のところで、「しるしと星々とに満ちた夜を前にして、僕ははじめて世界の優しい無関心に心を開く」ことはもう繰り返すまでもないであろう。

こうした自然に対する感性の鋭さは、多くカミュ自身のそれが投影されていることはいうまでもない。病気故に死に直面し、苦悩したカミュを「裏」のカミュとすれば、死の影に絶望し、もがき、生きる喜びを見出したか、見出そうとしたカミュは「表」のカミュである。ある意味では死に直面し、絶えず死の恐怖と戦わねばならない状態、こうした精神状態が、カミュの叙情的精神をやしない、それを一層研ぎ澄ませ、カミュを「詩人」にしたとも言えるのである。

『裏と表』や『結婚』や『シーシュポスの神話』を通して見れば、絶望からはい上り、どうやら生きる支えを見出したカミュの姿が浮かんでくる。

逆説的な言い方をすれ、絶望が、生きる意欲を与え、貧しさを肯定し、自然の「富み」を身近なものにもするのだ。

例えば、貧しさについて見ると、「貧しさ」は何と言っても、否定的な側面をもつことは、否めないだろう。しかし、その「貧しさ」が「富」になることもあるのだ。

『裏と表』は後で、自ら序文を付して再刊されたことは、周知のところであるが、カミュ自身に語ってもらおう。

La misère m'empêcha de croire que tout est bien sous le soleil et dans l'histoire; le soleil m'apprit que l'histoire n'est pas tout.....

Dans tous les cas, la belle chaleur qui régnait sur mon enfance m'a privé de tout ressentiment.<sup>23)</sup>

さらに、

Mais je veux seulement souligner que la pauvreté ne suppose pas forcément l'envie.<sup>24)</sup>

実際にこうした言葉を裏付けるかのように、同じ『裏と表』の「Oui と Non の間」において、カミュはすでに次のようにも言っているのだ。

Mais au bas de l'échelle, le ciel reprend tout son sens: une grâce sans prix.<sup>25)</sup>

『裏と表』の「皮肉」では、老年と孤独と死の対照的なものとして青年と未来と太陽がある。

「Oui と Non の間」では、母親との一体感を味わうという心的状態から「世界が溶け去った」ような「特権的な瞬間」を体験することで、死を克服したかに思える。「魂の中の死」では、外国（プラハ）での異邦人としての孤独な体験だが、後半は光の国イタリアでの解放されたような心境吐露となっている。

Je respire le seul bonheur dont je sois capable — une conscience attentive et amical. Je me promène tout le jour: de la colline, je descends vers Vicence ou bien je vais plus avant dans la campagne. Chaque être rencontré, chaque odeur de cette rue, tout m'est prétexte pour aimer sans mesure.

.....

Après l'éblouissement des heures pleines de soleil, le soir vient.

.....

Et, dans la dernière lumière, je lis au fronton d'une villa « In magnificentia naturae, resurgit spiritus. »<sup>26)</sup>

「生の喜び」の前半は、マジョルカ島パルマでの喫茶店での、旅行者としての孤独な体験であるが、後半はパルマの聖フランシスコ派の僧院での、生の根源に触れたような、時間が停止したような特異な体験の描写である。

風景に溶け込み、世界と一体となり、自分自身も世界の中の一つの物となったような「特権的な瞬間」の記録である。

J'entrais dans le jeu. Sans être dupe, je me prêtait aux apparences. Un beau soleil doré chauffait doucement les pierres jaunes du cloître. Une femme puisait de l'eau au puits. Dans une heure, une minute, une seconde, maintenant peut-être, tout pouvait crouler. Et pourtant le miracle se poursuivait. Le monde durait, pudique, ironique et discret ( comme certaines formes douces et retenues de l'amitié des femmes). Un équilibre se poursuivait, coloré pourtant par toute l'appréhension de sa propre fin.

Là était tout mon amour de vivre.<sup>27)</sup>

Pour moi, j'avait envie d'aimer comme on a envie de pleurer.<sup>28)</sup>

『裏と表』の最後の短編、「裏と表」は、霊と親密な交際を営む孤独な女が姉妹からの遺産で自分の埋葬所を買った話だが、

Ce jardin de l'autre côté de la fenêtre, je n'en vois que les murs. Et ces quelques feuillages où coule la lumière. Plus haut, c'est encore les feuillages. Plus haut, c'est le soleil.<sup>29)</sup>

一方には人間と彼らが買うところの墓があり、一方には太陽があるという次第だ。文字通り、「裏」と「表」である。

『結婚』では、

J'aime cette vie avec abandon et veux en parler avec liberté: elle me donne l'orgueil de ma condition d'homme. Pourtant, on me l'a souvent dit: il n'y a pas de quoi être fier. Si, il y a de quoi: ce soleil, cette mer, mon cœur bondissant de jeunesse, mon corps au goût de sel et l'immense décor où la tendresse et la gloire se rencontrent dans le jaune et le bleu. C'est à conquérir cela qu' il me faut appliquer ma force et mes ressources.<sup>30)</sup>

エッセイ集『結婚』は官能的に自然との合体を歌った短編集であるとはよく言われているところである。上記引用文は「チパザの婚礼」からの一節であるが、こうした格調高い〔声〕で、自然（大地）の讃歌が歌いあげられている。

「アルジェの夏」はいささか神話化されたアルジェの風物、及び人情描写だと思うが、アルジェリア（とりわけアルジェ）が、次のようになる。

Il n'y a rien ici pour qui voudrait apprendre, s'éduquer ou devenir meilleur.

Ce pays est sans leçon.<sup>31)</sup>

だとすれば、こうした思想を『異邦人』の背景として、結びつけることは容易であろう。

カミュは「アルジェの夏」において、アルジェ人気質について次のように描写する。

Et je crois bien que la vertu est un mot sans signification dans toute l'Alger. Non que ces homes manquent de principes. On a sa morale, et bien particulière. On ne « manque » pas à sa mère. On fait respecter sa femme dans les rues. On a des égards pour la femme enceinte. On ne tombe pas à deux sur un adversaire, parce que « ça fait vilain ». Pour qui n'observe pas ces commandements élémentaires, « il n'est pas un homme ».<sup>32)</sup>

「砂漠」において、カミュは豊かな自然の中においても死が感じられること。同時に死のかたわらには、ふんだんに我々に富を与えてくれる世界があること。まさに世界の豊かさと死は表裏一体をなすものであり、真の幸福はこの両者の均衡の上こそ存在することを把握したようである。これはもう『シーシュポスの神話』の世界そのものであると言っても過言ではないであろう。

舞台はイアタリアだが……………,

...une résonance commune à la terre et à l'homme, par quoi l'homme, comme la terre, se définit à mi-chemin entre la misère et l'amour.<sup>33)</sup>

Double vérité du corps et de l'instant, au spectacle de la beauté, comment ne pas accrocher...<sup>34)</sup>

イタリアという国は我々に、「我々の幸福」を訓えもするが、同時に、

「我々の悲惨」も訓える。こうしたところでは、しっかりと現実に関心を向けることが重要だ。イタリアはアルジェに似た風土をもっていると言えるだろう。

Mais qu'est-ce que le bonheur sinon le simple accord entre un être et l'existence qu'il mène?<sup>35)</sup>

Le monde est beau, et hors de lui, point de salut. La grande vérité que patiemment il m'enseignait, c'est que l'esprit n'est rien, ni le cœur même.<sup>36)</sup>

C'est sur ce balancement qu'il faudrait s'arrêter: singulier instant où la spiritualité répudie la morale, où le bonheur naît de l'absence d'espoir, où l'esprit trouve sa raison dans le corps.<sup>37)</sup>

J'admirais, j'admire ce lien qui, au monde, unit l'homme...<sup>38)</sup>

『シーシュポスの神話』が人生の不条理性の認識から出発し、結局は生きることに賭けるエッセイ集であるとは、繰り返すこともないであろう。

不条理は死の認識であると同時に、生きることへの情熱でもあるのだ。不条理は「失われた楽園」への郷愁でもある。

Il s'agissait précédemment de savoir si la vie devait avoir un sens pour être vécu. Il apparaît ici au contraire qu'elle sera d'autant mieux vécue qu'elle n'aura pas de sens.<sup>39)</sup>

一見奇妙な論理だが、カミュの生きることへの情熱を評価しておこう。そして最も多く生きることが奨励されるわけだが、「最も多く」とは物理的な時間をいうのではないことに注意しておこう。なぜなら、生きるとは覚めた意識で「不条理」を見つめることだからである。

ムルソーの最後の自覚と不条理のヒーローのそれが、ここで重なるわけ

である。

さて我々は最初に『シーシュポスの神話』の不条理と関連づけて、『異邦人』に意味論的なアプローチをしてみた。次いで、『異邦人』の形式的な構成から、『異邦人』解釈を試みた。三番目に、カミュが『異邦人』を創造する土壌を探ってみた。

ここで、我々はもう一度、一個の作品として、『異邦人』にはどのような特徴があるのかその特徴を明らかにしておこう。それは「現時の美学」とでも言えるものである。

『異邦人』は巧みに偽装された複雑な作品であるが、終始密かにただひとつのことを語っている。小説の根底には、幸福を求める作者の声が、低く、しかし執拗に響いて<sup>40)</sup>いることを若い研究者が述べている。

同じような事を P ソデイも、次のように述べている。

Cataclysmic defeat had drifted into the monotony of occupation, the prospect of liberation seemed almost infinitely distant, and a philosophical view of the universe in which all paths to the future were rigorously closed and all naïve optimism suppressed, corresponded exactly to the historical situation of the French people. In such an atmosphere it was perhaps inevitable that the positive side of Camus's work — the call to happiness, the creation of an 'outsider' who was completely satisfied with his lot — should have passed relatively unnoticed.<sup>41)</sup>

アルベール・カミュが17才の時に、結核に罹り死の意識に取りつかれた事は既に述べた。死の問題は、或る意味では、彼の一生の問題であったが、とりわけ、17才と言う若さで、死を意識せざるを得なかったことは、彼の文学に大きく影を落としている。特に、若い時に書かれた作品、所謂「不条理期」の作品は、死に直面し、絶望し、悩み、もがき、あがき、そうした中から、なおかつ、生きる意味を見出し、幸福を求めようとした軌跡を

描いたものであると言っても過言ではないであろう。

このように見てくると、初期の作品には、現在を大切にしようという姿勢（特徴）が出ている事が読み取れる。過去は、過ぎ去ったもので、問題の射程内には入ってこない。未来はどうか。普通なら「バラ色」の未来を描くのだろうが、死を身近に見た、覚めた意識では、とても「バラ色」どころではない。時間の描く「放物線」（『シーシュポスの神話』参照）の彼方には死が見えてくる。「明日」に期待して生きていても、所詮は虚しい営みでしかない。

Mais tout le monde sait que la vie ne vaut pas la peine d'être vécue. Dans le fond, je n'ignorais pas que mourir à trente ans ou à soixante-dix ans importe peu...<sup>42)</sup>

要するに、現在が、現在だけが問題なのである。ここから「現在時の美学」と言った言葉に相応しい文学が誕生するのである。カミュの「不条理期」の作品には、この「現在時の美学」が貫かれているとってよかろう。

少し古い文献からの引用になるが、平凡なサラリーマンであったムルソーが、ふとしたことから、殺人を犯し、死刑を宣告される。この時から「ムルソーは、彼の個人性から脱却<sup>43)</sup>し、悩める人類の象徴となるのである。

※ 本研究は、平成12年度関西大学学部共同研究費によって行った。

(本学教授)

注

- 1) 西永良成長著『評伝アルベール・カミュ』（白水社）p.22
- 2) ジャン・グルニエ著 井上究一郎訳『アルベール・カミュ回想』（竹内書店）p.7  
～10～この引用に関しては、井上氏の訳を借用した。
- 3) Albert CAMUS: *L'Envers et l'endroit* の「Amour de vivre」（Gallimard）p.45

- 4) H.R.ロットマン著 大久保・石崎訳『伝記アルベール・カミュ』(清水書院)p.132  
— この引用に関しては、大久保・石崎両氏の引用を借用した。
- 5) Ibid. p.135
- 6) オリヴィエ・トッド著 有田・稲田訳の『ある一生 アルベール・カミュ』(毎日新聞社)が2001年に出版されている
- 7) Albert CAMUS ; *L'Etranger* (Gallimard) p.38~39
- 8) Albert CAMUS : *Noces* (Gallimard) p.40
- 9) Albert CAMUS : *L'Envers et l'endroit* (Gallimard) p.109
- 10) Ibid. p.109
- 11) Bernard Pingaud : *l'étranger* (Classiques Hachette) p.26
- 12) Albert CAMUS : *L'Envers et l'endroit* (Gallimard) p.88
- 13) 白井浩司著『アルベール・カミュ その光と影』(講談社) p.119
- 14) Albert CAMUS : *Noces* (Gallimard) p.86
- 15) Ibid. p.91
- 16) Ibid. p.93~94
- 17) Albert CAMUS : *Carnets I* (Gallimard) p.201~202
- 18) Bernard Pingaud : *l'étranger* (Classiques Hachette) p.12
- 19) Albert CAMUS ; *L'Etranger* (Gallimard) p.21~22
- 20) Ibid. p.26
- 21) Ibid. p.27~28
- 22) Ibid. p.29~30
- 23) Albert CAMUS : *L'Envers et l'endroit* (Gallimard) p.14
- 24) Ibid. p.19
- 25) Ibid. p.63
- 26) Ibid. p.96~98
- 27) Ibid. p.112
- 28) Ibid. p.115
- 29) Ibid. p.121
- 30) Albert CAMUS : *Noces* (Gallimard) p.20~21
- 31) Ibid. p.48
- 32) Ibid. p.60
- 33) Ibid. p.81
- 34) Ibid. p.86

- 35) Ibid. p.93
- 36) Ibid. p.96~97
- 37) Ibid. p.97
- 38) Ibid. p.100
- 39) Albert CAMUS : *Noces* (Gallimard) p.76
- 40) 東浦弘樹著 *Bulletin Annuel d'Etudes Française* 一年報・フランス研究—18 (関西学院大学フランス学会)
- 41) Philip Thody : *Albert Camus's 1913—60* (Hamish Hamilton) p.30
- 42) Albert CAMUS ; *L'Etranger* (Gallimard) p.160
- 43) Roger Quillot : *La Mer et les prisons* (Gallimard) p.96 「Meursault,…………, échappe à son individualité.」